繪本豐臣勲功記 八十

727
90
234

繪本豊臣勲功記

八編 十

東京圖書館

和書門	小說類	二六函	六架	號	八〇冊

110
90
254

繪本豐臣勲功記八編卷之拾

目録

清正常神脇脫激湍危難　附　怒戮蚺蛇
同　清正激溪ヨリ落入る図
三十七勇大蚺蛇を屠戮する図

清正発伴與隆景面背攻る　附　放火城中

加藤小早川激陷梓山城　屬附　金子戦死

加藤勇士力戦遂擒熊谷　附　勝直服義

甚二金子信之清潔死の図

繪本豊臣勲功記八編巻之拾

東京　櫻澤堂山　刪補

清正帶神符脫激溪危難　屬　怒戮蚺蛇

宋の孝先尚書と為て。周雍を次で省を居を。妖変古をよ
く滅をと滑り。是刎地正よく邪妖と避るの理あるもの
と。縱令清正妖怪を劣るといふとも。正とんして義を至る。
邪妖いうんぞ害を加ふるをとと得んや。然わども三十
七人ハ。互を扶ケつ助ケらをつ。屹山の危難も逃れ出て。
行先まを〳〵辛禁苦辛し。三日を経〳〵りしうども。這ま
での武勇を や畏をりん。恐しきる妖物変化も出ぞ。当日
ハ七月十四日の。まさ正午をへ徐星速き。日晷の樹間を

微しく着えて。幽微なる水音潺くと鳴弦るなり。ふ城下怒濤正ゝびなる強勇士なりち箇ひ。遠く聞やる渓の湍ハ是這山中第一の難渡ゝして。老仙も怖畏をする。激渓澗なひりもん。然なりてもまた一箇の大蛇と。治をべき所ありと言つるゲ。主君の威威なる感服して。敬對ざると覚えさまと。絶り絶々て仍なるやどふく。大渓澗のロなる出ぞり。水音激して勝なる裏き。耳とも聚くぐりうある。渓徑およそ七八百。淺瀬ハ大石小石と輾ぢし。岩なる激きて白波逆立その疾きさと矢鉋の如く。深き淵下ハ蓋の如く。あるひハ過き或ハ涌紀。畏しるんど言もなし。浩る孤而というなりて。練深云双の勇士ありとも。廻ふくんバ渡さるまじと。まつと向面を変て行バ。断崖の高きこと十餘丈。岩石の上なる怪しき樹木根を支え枝を結び。逆なるつて生綱る。また渓梢と着下セバ。渓ゲ上より渓の下へ。瀑布とかつて零る而ハ。数十丈もありとおぼえし。水落る声雷の如く。水煙深く雲霧なる等し。這辺ハ両岸をべて嶮しんとバ。渓へ下る徑さゝなるふし。廿程渓梢へ下りて伐んと。て樹の眼岩の肩を跗。古町など来りて着るなり。隻崖崩とて渓洞へ。下易き場而ありりをバ。先やゝより下んとて。各くまとまと提合て。七八尋など下来り。渓の湍なる近づきつも。水面をよく観をバ。淪くとして中流ハ。底幾量とも視竟ゲし。然ども向面の岸低く。樹木の跡なる

えらびとて。各く進ぬ迫だるゝ。
中ふも木村伝蔵ハ。太縄把て這方の大樹ふ繋と括り。お
ゝと帮ふふ溪崖へ飛紀。遮拒ふあるべき木と伐拂ひ。其
身ハ頓ふ羸とふり。武者禅ふ刀を膝。彼大縄の末と捉て。
底も知ざる水中へ。吊地ふ潅と跳投ゝる。個く竟やと
見も放さぞ。額の汗ふし膳と冷して看護り在る。今又義
が跳入ゝる。溪流ふづうふ百丈ばかりも指へ下らべ。逆
墜ふある瀑門ふして。水底ハ岩角競紀。刻と立ゝる如く
ふる由え。ゝへ落ふべその身痛依ありとても。保得る
ふと雖ふまじと。頓ざるより有安易ふして。苦もふく向
面の岸ふ辿りぬ。木村ハ原糸捉別ふ砂の表ふをべ。水練

と得るふと溪竟の如く。水と揮ふて老樹ふ捉岩。同じく
太縄と三回繞し。個止て赤蔭び。太縄ともつて激流と。這
方へ泳返しつゝ。個く泳りひへといふ得ゝりとて井上
表本飯田舘次弁ふ泳りて。十人毎ハ清正ふり。佐勇士ハ
ふ赤羸ふをど。主計頭ハ甚乗りて。太縄の指捉るよと
看えしが。弓ふふ神府の笹拏把へ。潅と溪中へ跳投つも。
激波吹分捲分て。中流まで出ゝる時。持ゝる太縄岩ふ搦
て。亡流ゝくくといふろとおもえべ。中より拂斜と搦切さ
り。両岸の諸士竟や堪ゝじ。いろゞしておをと帮助んと。
狂気の如く頭廻。我もゝくと水ふ跳入。中ふも大膳不敵
の又造。力縄も持さぞして。翼舎の如く下流ふ走行。溪へ

潼と跳入て。水の落際より端止り。流来るべ助りんと。身と
細ふして待惑う。這時大將清正へ。縄の切るを覚よう
も。渓間の底を二三間へ。足端止らで。流落しが。大丈夫な
る大將なれば。左の脚ふ力を投。神翁を把て推載くよ。甚
身へ磐石の如くよあるて。底の石をも踏迫だろう。難な
く向面の岸ふ着しへ。武勇神力相助て。怪しむまでふ感
佩せり。ときよ備勇士大息を吹。緩て安逢の懐思とふ
ろう。次よへ山民を浸さんとて。太き義蔓を繰ねさせ。お
を浅浸せる大縄よ串し。飛弾就中の境よある。雑籠の浸
の校比して。名器雑器名種まで食悉く推浸し。各言葉ふ
礬辞り。ふ韓鞮よ身を牢めつも。日光を覩きべ晝午をば

う。午飯喫して進まんと。食産を設けて昨夕憩う。腰
名糧を取出し。各雲りるぞ。下産ある山民あ二人。
驚きて倒きう。甚ちや昨夕の鉤よへ。毒やありて遠造
化うと。迦ふ瀬を覩合せ。惘然とする中よ家義豆本。儼と東
南の谷際を視べ。今まで白面晴ふ。怪しく雲霧朦
朧として。次取ふ弓岑ふ震羅る。斯へ不審あり個くよ。弓
弦の准彼せよとて。二弦を迫茱を強ふ。甚ちや妖怪
見ふさへぎべ。撃損さんと十條挺。抱既そろえて待構
へう。次漸よ山谷鳴動して。嶋の如き甍陣来り。白至忽
地黒雲の如く。周とあるふ陸ふて。東南の谷際より日月
の如き眼を瞰らし。裂然として出来るへ。面しく老仙ぞ

力綱切て
清正大激溪ふ
墮て既ふ危ふ
かゝんと欲す

教へる。大蛇に遭ふまゝ。其の擒捕と大将の。声は高くて家臣之本。こゝハ元来伊豆守と号りし時分内藤助の一子なり頗て明智光秀に。蛇術狠辣セし人なれば。最も秀院の娘を得たり。百目院の強業もて。継けて二ツ撃ちるゞ。院嘗ぜ大蛇の。両の眼に撃中ちり。おゝ痛い痛いと。眼を目面に撃ち出れば。天地も忽地傾る如ど震動して。向面の谷へ転落清正も恐しく指揮ふ。迚替て孔雀セしゝば。溪水を巻起岩石を飛ばせ。狂傾してぞ損ずる。今までぞ怪しゝ雲霧の起しも。忽然として晴ぬり。天日申の空上に。昊々として視えさゝ。偖古を雲霧と変えしハ。正しく毒蛇ゞ水気をもて。吐着

ると見えたり。俺們三十餘人の者ハ。甚急副ありりる由なる。渠ゞ毒に損らざれども。山民の薬弱なるハ。斯の如く。死しゝる古を不便なれ。今日まで千辛万苦して。明日一日と経るものなゝば。再度故郷へ還れべきに。這期に迫んで死しゝるも。天命迫れどゞきはやと。志ぢ〳〵なれ嘆息せられ。強勇士と叡め賤の民に。除毒の薬と服さしめ。這地ハ殘毒あんぬべれれば。所と換て亡民と。

蘇るべしとて。擬撫をセ。一里許登りりるゞ。志〳〵や絶頂とおゞしくて。四面眼と遮ふる山なし。夕陽を藉りて熟く視れば。古をより西南に里半許ふして。樹木叢繁茂しゝるハ。是焼山の城郭なり。多院の喝喊の声ろゼの

まふ〳〵所ゆる方。自方の合戦を挑むあらん。加藤主税三十七人心中まを〳〵続記。まづ〳〵ふして死民と葬り。倘や死骸と猥ふどの。穿出をおともやあらんと。大将指揮ふし。木村井上侍ふ命ゼらをて。骸と瘞めし甚上ふ。盤石と載て壓持とし。其陽ふ見的と標さセ。此地の合戦羅でのち。懇切ふ弔養セらをぬ。然べ南欲へあらふ次篇し。明日一日ハ這所ふ。身躰の疲と補ひ。然して城中へ撃投らんと。飽まで飲饗まで食ひ。倦まで息と養ふて。中元の暁と待在ふ〱

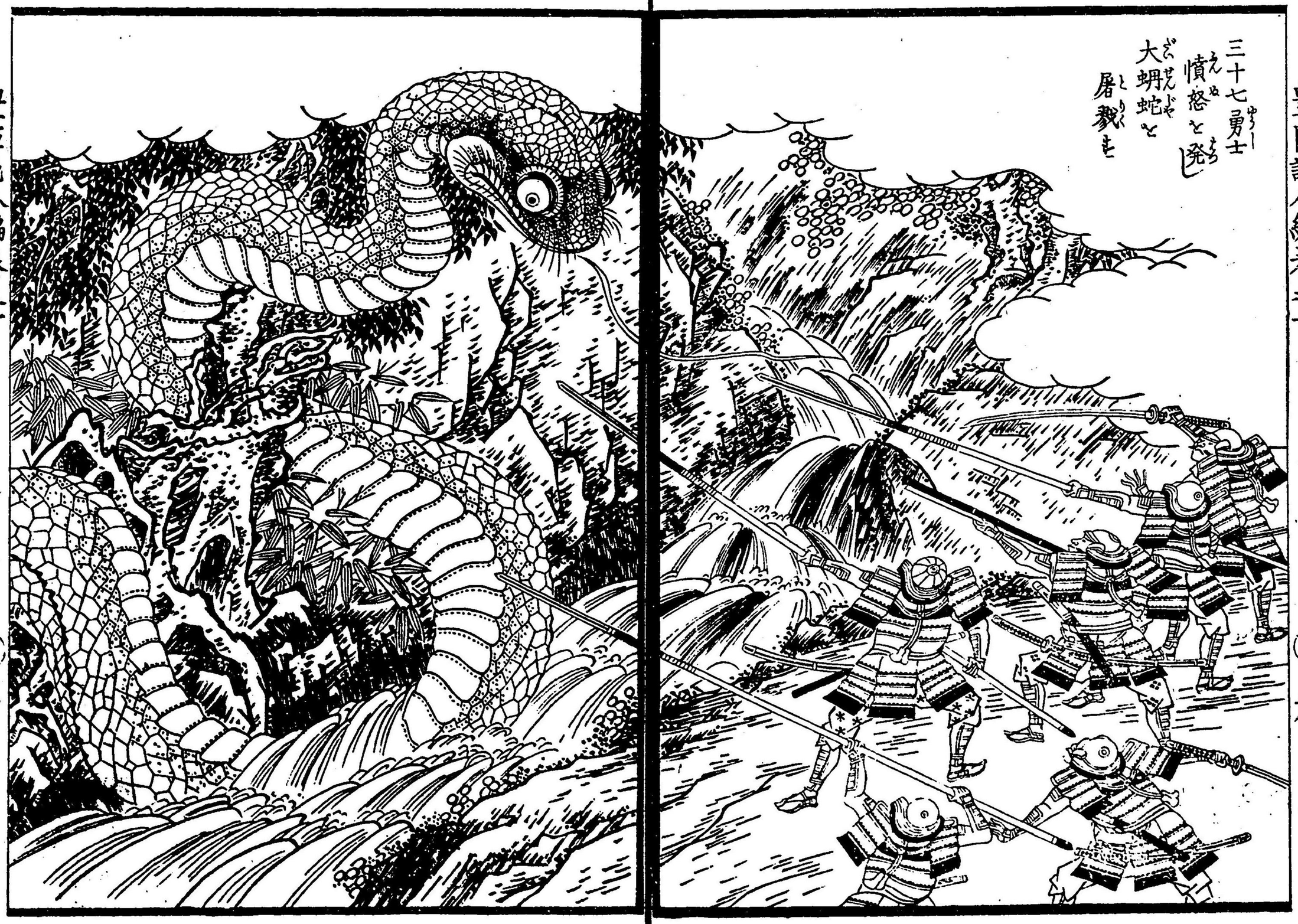
清正発烽與隆景面背攻　属敵火城中

下邳の虎が羅ふ彼をるも。金椒の獣が南ふ涙るも。よく其彼をる所を知て。正ふ背くの道あけをべあり。今焼山の山中ふして。熊と貓ハ熊その脱をる所と知る。蟹と猫とハ自己のこと知て他と知ず。焼山の城中の金子親忠ふるものハ。自も知他とも識といふとい〳〵へども。恥を知るふ足ときべ。這ふ身命と捨るふ近ぶ人を物ふ較比ハ。位品と紊をふ似〱りといへども。五十蔵侍が拳止ハ。彼満天ふ彷彿〱り。金子侍が拳止ハ。蟹猫が暴ふハあらねど。ふ彼をべきを彼さぞして。死と潔ふをるハ忠死ふ声名と潔ふして。世の疑謗を蒙ざるハ。今を知て後と識ざるものふ似〱り。名と清ふして家と亡をが宜欲身と苦めて家と興をがよきろ。嗚呼其判しがきものハ。

忠義の士の終始よあんとあり。然るどよ加藤清正。木村。井上。長本侍へ。十五日の曉天よ。絶頂の嶂と辟出歩行ふが らよ先祖の精宮と弔礼ふし。ふもより路先へ。地原くと も暴く踏まで。天宮くとも傻る意地して。遠く慮里近く察し。嗟とさへ。地よ口憑るまでよ念いも。山と一里許下 るよ。這辺へ草木更ふ有ふして。悉く赤石あり。今や軍の 始ると覚えて。喊の声の聆えりる。其際よへ嶮くと。石を 砕る声の聆えさり。仮田覓岩清卑くも聆屬。うち歓びて 彼士よ嚮ひ。あもと聆もよ這辺の谷際よ。石と砕る声の 聆ゆるへ。宮て軍用の石よ。自軍の進る時とまりて。 上より抛下ものあるべきが。渠侍と跡らぜ頑ちろし。

直地よ城へ攻投らんと。躍躍るを清正制止し。最早城を 乗取さるが如し。彼民軍へ石面ありべもべ。まづ彼不 よ往て静ふ食糧し。若して渠们を導者とし。小早川ふ も晴号をあらせ。面門の合戦と十分よさせ。敵の意を面 方へ奈たせ。其虚を視徴し山を下りて。攻入こそ上策ふ らん。去朱や石面を荷擔朱もんとて。職人工厳よ歩侍る。 石面車えてうち響き。慌忙きよ持さる。鑿鋸槌とうと えよ投奔いうある御用のひて。這所へはおもしりるや と。言せも果ぞ木村又蔵明星の如き眼と蠢と睫き。各侍 へ定で城中の金子が命を崇りて石と砕出し。防禦の備 よさるものあらん。ありの来よ稟をべし。備一題も雑言

べ。一個も殘さず首を刎ねん。いうまゝと驚呼る。その猛憤まことに怖怯をいうまも推しあふぐめく。金子。國吉の命を奉。那般の石を砍出せのこ。別に存ぜる卒も赤し。命ハ叙して函へうしと。拝く稟去る。大將清正進こ出。汝倅去より城中へ案内をいくさをべし。其襲撃をバ取らせんとて。襟底の狠子探出し。古色を汝倅に硯るあのざまづ俺們に食料をさせよと。腰名程を各取出し。これを喫して山邨より。俾來りし百姓と遠地に留置。後日の恩賞を固く約して。三十七人甲冑に身を固め。そをく短筒を握げて。彼石面に導指させ。程又古町下りるが。前ホ一聳の小峯あり。這峯こそ晴号を揭るに宜しと。狠烟二條立させり。そをハ囮き。小早川隆家ハ。過る天八日清正に別をてより。背路攻をあやぶこ。毎日くに面門より。火急に城攻の態をあをい。頼て清正と計議を約し。城中の名士の氣を。西門の方へ案ハせて。背門をやをく。敵らせんとの謀計あり。古色ゞ陽濠に城中よりも。大木大石を拋墓く。隙隙ホく拒拒るを元。男ふやうに進こえず。喊を作り号流を撃墓て。呂政進るの機勢をホし。晴号の日を待居り。既に十四日の夜に入りるが。隙家桂ホ帝古来つに猶色るゆう。清正大膽不敢ホも。後山より進こしゞ。鬼神天狗も越ぐき而ありと吟つるものを。いろに清正猛勇ありとも。よも通り得るホと


三十七勇士
憤怒を発し
大蚺蛇を
屠戮す

能ふまじ。唯己失を引出さむ迄もよろしと慢じつゝも。十五日の蚤朝より。城に向ふて攻させ給ふ。今天や七月十五日にして。清正ゞ約セし日なり。空ありといふもへども。神佐不思議の主計頭。然まで不媛悔べきふもあらむ。晴号と看ゞ死を顧む。是北に面門を撃破るべし。努く急るまと云ふ迄と。嚴しく指揮して隊伍をろと先。隊てユ丈ふ一羅ゝる。牛蛇といふものを正斜に進ませ。牛犬矢といふハ牛の背中へ百目の矢蛇三挺づゝ結ひつけさせ給ふて。つて面方の門へ向るときハ犬ぶと切るよう也。次に独幸又百人。古毛ふ又百の弓弦を持セ。喊を作りて推進ふり。今日先進の斜将ハ。桂又帝古毛つ宗宗なり。焼山の寺脇へ。馬を進むる晌こそあれ。山の後背に三條の狼煙。天に冲て視べ。欣然として警悦ふ。備ハ清正怖しくも。強ふく後背へ出らるゝ。城に不思議の大将ふと。身の毛を堅て感服ふ。まづ陸奥へ寄ると告させ。まもなく懸で激発せば。大将陸奥ハ。井寨に登りて瞰もセず。後山の方を視遍る所に。晴号の狼煙確くと三條まで立上る。古毛と見るゝ小早川。井樓と明渡と跳で下。本部の勇名一万餘人を探出し。今清正ゞ晴号の狼烟を看るゝ。ハ。必とも牧餘をべきに。あゝず。進めや進め勇士輩。迂も古き山谷を越得て。背方え出らるゝ。大将さハ。ある中に。何ぞ大迂闊ふして。僅に四天丁に足ざる嶮岨を。斬まで敢に遮らるゝ。小城一塁を

攻伐に徒に日を送るハ。足おき者にも劣るべきぞ。死と怖ぢて去を逃る道あ也。恥とおもひ名を惜まば。何者とろ畏るべき。身を捧て進むとも。跟へハ一足も退べからぢ。喇に縋々と大將隆家風捲起して正斜に進めば。去也に随ふ勇士軍。迭に恥合懋合。嘶く声して推登る。拒杭を備へし城名軍。去也と視るより。甚ハ敵名ハ近づいさるぞ。防げや禦げと炮矢を発セ。石を輾ぜし木を投落し。正面に於て防戦を。這晌加茂を後ハ。石匠軍に導指さセ。背方の門に走近き。面方の虚喉と窺ふに。今や合戦正最中とおがしくて。多撓の苦喊の声耳に貫き聴えらぢ。清正上下三十七人。佐古、そと虚歓び。一梅の柵を跳踰

四方を視るに浩る嶮岨と擾くるみや。番名さへ一個も在らぢ。意寧しと走若くく塀堞砦に。索捜ると拋うけく。先と競ふて躍投。四角八面に虚地して見也べ。防禦の備ハ更あり。名士一個も在合さねば。意の陸に城中と視虚。陣厳くくに火を放ち。機會に風の吹起りて。怒焔爆くと燃熾り。熛焰散爛して。次第に本丸に焼移る。三十七人の勇士達ハ。得ぢかしと捧破て。面方の自軍に隊と合セよと。這隅に孤也。跟巴支城名と。斬伏突起悩まし。ぢ也べ。加茂ぐ浩る山谷と。戦て来しと。ハ茂ふも知らぢ。吐峰城中に傑殺人あり。誰孰あるぞ。捉と。同士酸のくに去て噪動也。主計頭大声おげ。是ハ加茂

主計頭清正ガ。十万余騎の神軍長。金子ガ援斷スル不の。後方の山谷を容易く絶滅セヤ背方ヨリ乘投て。城墨ヨ軍ハ燒臨シリ。方僅ハ弥長ホおもみとも。逃るべき路交ホホし。鹿盃弁戈ーて降参セよと。呼ワリ〳〵攻スてクどべ。城名いよ〳〵岩ルとち。天足地首して孔走シクり

加茂小早川激臨燒山城　屬　金子戦死

獅子口を開て一遣奮迅スる駒ハ。ヨ山麓一岩ろ〳〵と猶ウり。験ヨ怖しくも加茂ヨ後。ヨづクニ十七人ヨーて。おの城中ヨ攻投おと。よもも人とハ懐ケれド。這駒城將金子傳名清馳忠ハ。面門の射寨ヨ在て。自軍と指揮ホーホ早川ガ。勢を拒抗在シクりヨ。おもひもククを城中ヨり。火発りて。熾ヨ爆出ホーしクる隙もホく。孔名松走来り。加茂清正背路より。大軍とともて推投シクりと。注伸と聆よりも。了得の傳名清驚懐ホー。斯ハ不思議ホる清正ガ拳勅ラ家。集奴縱合バ鬼神ホりとも。燒山の後ハ戦ら也ホどとおもひーヨ。よも人間の業ヨハあるまじ。若べとて加茂ガ勢。多くハあ〳〵ド一揆ヨーて跑散さん。熊谷来也といふまヨ。二間様ある十文字の槍提ガて。熊谷四郎方来つヨ斜させ。面門の自軍と觀て。さとへ後路へ火焚来るとも。這駒とよく〳〵防止て。小早川ガ勢と城中へ。かホらぞ投紀もふまそまぞきぞ。名其うちヨ清正と整捉。火の発と結めて小早川と攻岩さん。交て指揮ヨ背くまじく

言葉て。馬より拘い出。后方南て驀地に馳向ふ。熊谷勝直へ
這駒奢くも加賀ぐ勇士。三十七人ぐ中に馳入。十六貫目
の鐵材棒と。霹歴車と揮巴流。井上と跑木村に揮り。奥本
飯田と右に交赤星鮭と左に牽。あるひハ進んぞ退ひつ。
死力と発して紅色る。跟に縋きし金子親忠。嵯熊谷と毆
き赤兵軍。縋ら〳〵と正斜に。怒跑の像く棚て投り。熊谷
に力を添ら出。火水に赤きと戦ふ〳〵り。日本兵政の清正
赤きども。敵ハ大勢自方ハ小勢。後背路ハ猛火に断き〳〵
出り。主計頭声を暴げ。城兵いろハど猛勇ありとも。山
城の時の妖怪に接出べ。十ぐ一分の敵あるぞ。後へ退べ
火に焼きん。金子と拝で戦死せよと。退記〳〵戦ふ相ハ。

阿修羅王ぐ梵釈の。天軍に向ふ猛威と発し。双方智勇絶
倫の大將陽に開き陰に閉。迭に呼懽合。陰の実陽のあ〳〵
んハど。太刀の鞘行のつぐくぐけ。奮激血戦〳〵り〳〵。
備ハ面門に向ふ〳〵る。小早川隆家おハひに焦燥い〳〵に
城兵拒抗とも。面門破の斯怠慢ありハ底ぞ。城中既に
火と〳〵り〳〵。倚清正の主従ぐ戦のうちハ。一士
とざも戦死させ赤べ。渠傍ぐ勢切と姫嫗で見殺に去さ
りふんど。世上の口に嘲ら出んハ。小早川隆家ぐ。末代生
での恥辱あり。進め〳〵と激指の声の。まぐ耳らぬ小拙
ぐ隊すり。坂程太夫と称号。突と跑抜て正斜の牛と。去さ
さらに拒掛出べ。牛ハいろつて跑出ーぐ。面方の扉に歯

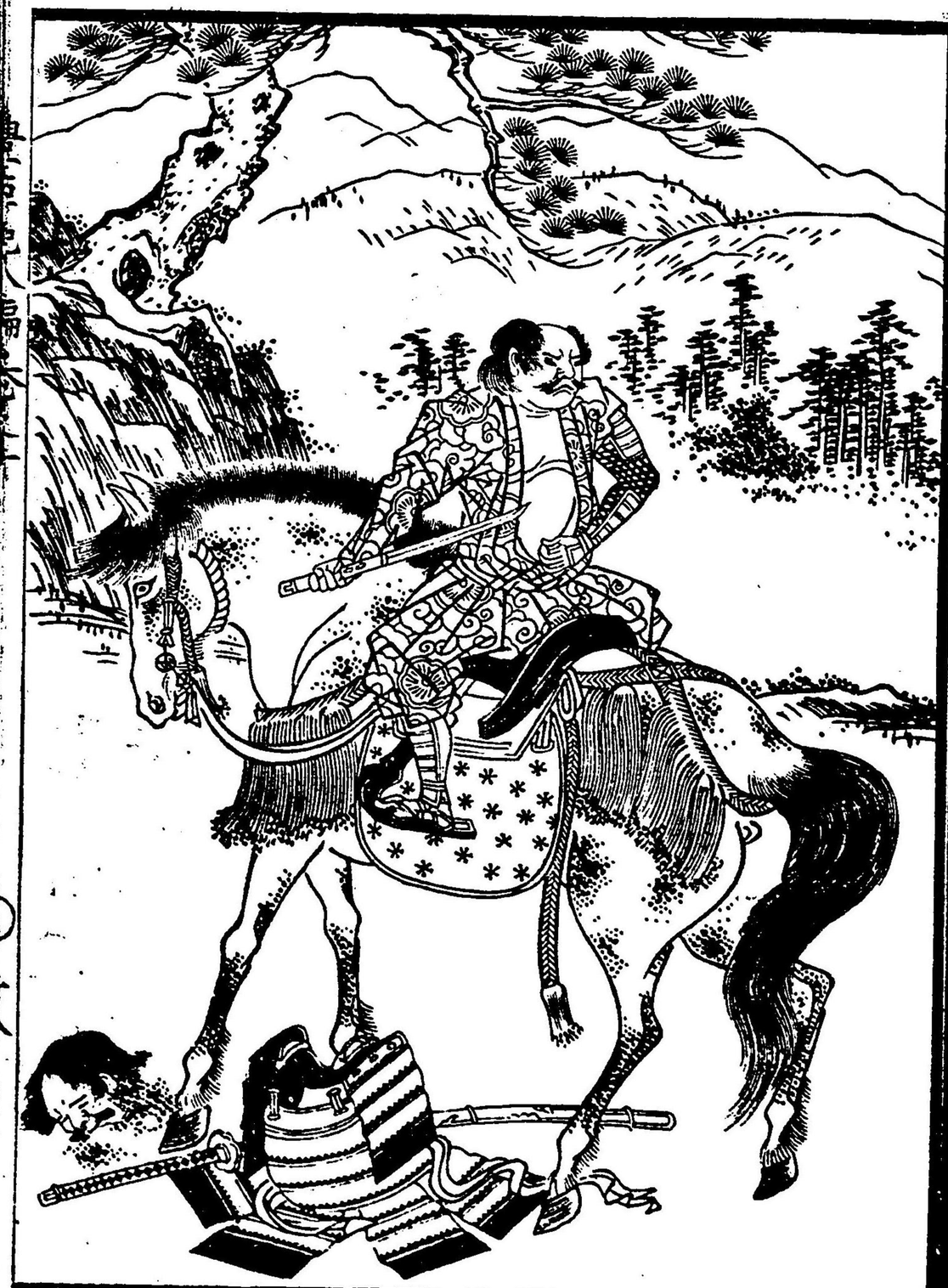
ると雖る采よ。偽設し多號数十挺。一吐よ煙と発する者よ。牛ハまを〳〵奮激して。氣の波よ角と突投裂岩とくづをと見るより。姫路太丈牛と跳踰つ推破りて大吉発。小早川隆景の勇臣姫路太丈吉能燒山城の一番乗と。峠もう蒐て迎入まべ。吉まよ縄て先陣挂又弟吉弟つ。兵士と懲まし。孔入まを。國吉ゞ隊の軍兵華。弓多號とも打ちさまを。途と失ふて彷徊り。千傾万倒するかどよ。得〳〵と掛起薙伏ふ角万面よ跑散まを。國吉又弟兵湧。今ハをやか吉まで有りと。挂ゞ隊伏ふ殺投し。故十又吉弟挂捉て。その身も敗ケ口藤とうぶり。孔軍の中よ戦死まを。城兵こまよ氣恢して。哭もとぐらぢ。兵ちゞ〳〵よ孔走して。面門全く開ゞり。金ふ親忠こまと聆より。剛勇の心血地孔まを。紛然として加茂ゞ隊よ。警破らまて攻〳〵よある。木村井上喪本飯田侑。金ふ熊谷を中よ軍で。剰をまずと攻ある。落るところへ面門より。ふよ川ゞ佑軍勢。沸潮の如く逼進りるふぞ。金ふ。熊谷憾念ふゞ〳〵。城と見棄て正一門地ふ。後路の方へ地出し。城の方と眄まべ。煽〻として黒烟起。火の発の燒ら如方もふし。吉まと者より金ふ親忠。両眼よ血と流ぎ。熊谷侑よ向ふていふ。よまを此城よ凝守古とハ。敗惨の軍よ切あるとして。主君の釈撰よ因てあり。然ども兵是汝們ゞ。忠奮義激をるふようてよく大敵と防ぎ〳〵ども。加茂ゞとめふ背破ち〳〵まを。阿容

阿容と城と焼き。なんの面目あつて。彼人に面と合さるべき。先度富尾落城の機會。既に戦死をべきりき也とも。憐くび主人元親と。存亡と共にしんとと望りり。今焼山の落城い。人よく古き也と恢をふあるぞ。天の助る所あり。然るに日あるぞ背方と。破る。加藤い強に人ある。ま。唱は燃しひりあ。長曾我部の存亡危急。言ぞといへども既滅ぬ。這期に近んで武士なるものい。よくく心を決をべし。人壽五十餘年と知とを。惜くても猶限りあり。長くもあるぬ命と惜くて。淹しく拘ざる名と汚さんとと。何程り拘憾りざらんや。共に武勇を輝して。末世に誉切を残をべしと。磯谷五十有餘人と正円に備え固め。決も死あるぬ清正り隆家に撃拒で戦死せよと一場嗔き。加藤が孫伍に突入ぬり。その猛きさと奈羅延神が。夜叉羅刹鬼と蒐るが如く。奮くとして東北に征。烈くと西南に浸り。維模安是に紅起くく。一方と斬拔て。自軍の名と顕をば。三百人だりりにある。再遣隊伍と立整し。小早川が本陣へ。勃然として突投ぬり。死憤の金石に斬起ぬを。鑽くにあつて敵をりるが。小早川の勇士ども。三十餘人と撃投ぬり。自方も五宇戦死して。百騎だりに撃減さを。まく引返して加藤が陣へ。吐と嗔て丸突ぬを。這胸既に面方に倣えし。加藤孫紅の偽軍勢も。同じく城に迫投て。木村表本。飯田紅名。由のく主と守固めて。

次取る隊伍を整面ところへ。金子親忠憤発して。飯田清成が隊伍を破り。縦ひて喪本正虎が隊を突投て紅恼し。三遠味で家義が衡軛を立る堅陣を。縦ふく破て紅通り。自分を表をべ四十餘人馬さへ殘らず殺し。身鮮血を泥をて。盧紅を孔裂せる。九人死を至をど。一生殘りて両眼を。開くぎりの死武者ふをども。大軍の敵を攻とも屈せず。清正が本陣目的て純入る。其へ撃捉と本村家義。赤星井上。庄林鮒小城を級とし。佐隊一列を群集起百重を囲で擬記る。ふををがをめを金子が従名。一騎も殘らず戦死を。傳名清今へ後思ふし。戦場もをや至期ふりと。澄の上帯引解き。鞍鐙を突起あがり。天ふも聆ふる大声をして。後及宮雄の城主金子傳名清親忠。逝年又十一歳をして。潔く自殺をる。ふふをぞく名死後ふ。活誠捉りしと橋言吐ふ。死首刻て巻切をセよと。馬上をおひて脇十文字を刻裂き。太刀を加へて正逆相を。馬ふり落てぞ死失ふ。烈しき武士の終没ありりり

加義勇士力戦逐擒態谷　属　勝直服義

劫滅ををべ大地尚崩る。焼山の城。いふある嶮とをのむといふとも。滅果の期といふんがをべき。然べ這城既を破をて。守将金子傳名清。最潔く戦死せしらべ。清正弦をふをを表て。又ふくく寄態の金子が終相。又ふるまがーき勇将ありりふらぞ首を捉ことふりを。吾別を科理むれ



金子傳
兵衛加藤
清正の智
勇を感じ
潔死する

ありと。制して那方を眺と肩行べ。熊谷四郎左衛門勝直。
をさしも弱倦気色なく。一疋の疲さへ負たぎ。熱然として
戦ふより。主計頭と共に。感嘆せること女うぢぞ。
活る勇士と刀下の鬼と化ことの最惜さよ。個くらをと
活捉べし。撃ちとさへ得がさき勇士を。活捕らんとて
へ組るべくもど。熊谷ふりとて。鬼神ていよもある
まじ。後山の蟹猫鬼より。易うんとおもふあり。速く
馬と突作し。活捉まと指揮しるまべ。飯田。喪本。井上。木
村。承命ぞふと放孔くくと走蒐り。熊谷一騎と中に取囲
前よへ迎らで後より。馬の尾筒後足ふんど。滅多棚なお
しうまべ。馬へ堪らぎ。屍風の如く倒るゝと。熊谷もらさ

ぎ跳命んとて。其を紀さセじと。鮮赤星力に信せて脛極
拂ひ。輾ぶと木村斉義が。左右の脇と抱揚まべ。喪本。井上
背より壓捕て。言子眩子みぞ。郷さう。古まに囲て小早川
も。加義も陣と推寛げ。凱歌唱て。一隊ふくに兵士を纏め。
まづ自軍の兵の。戦死負疵と調紀させ。次に軍功の兵士
と紀して高座の饗賞。あうびに負疵の療治とセさせ。暁
まべ七月十六日。己の上刻の漏と聆ころ。熊谷四郎左衛
つと繋出させ。清正近ふ進倚て。勝直を熟くる。身の
長六尺二寸。就色赤うして黒色と常眼尾立て頬背高
虎鬚逆に生さまべ。依損ねし那羅延神うと疑ふぞうう
の相貌あり。清正心頭に動き。いうに熊谷四郎左衛門つ延

幸くく足下の武勇戦術日本無双と謂つべし。君故ありらも感ずる不絶りあつて。這上い心と革め。我ふ仕て勲功と。子孫ま長く傳籍ふし。名と天ゞ下ま蹟きんこと。真の本望あるぞやといふ。熊谷頭と左右ま去振。乃士死路ま屬ふとい。原来帰元の如しとを。二度君ふ侍仕ことい。弱てふを武士の恥る不足下多くの居ともちゆま臨て心と変ずる居あるべ。愉快しとおもひ玉ふ歟。足下も秀吉の居家あり。倘活捉を捉て敵の道理ま説破らを。忽地心と翻して。服する所存おをるや。承所らんと結同。清正莞爾と笑頬ま笑甚祇条至極の理あり。君い素より居家ふりとて。二心ふきい。勿論あり。然といへども。主君のさまま

ま去るの期い。死去るとなるり忠義とせ。生て其身と全ふふ一時の恥と受るとも。主君と助け家國と興をとも。つて。大忠居とをるふとい。我何と待ぞして。汝も是と知りつゝん君ま仕て死と惜ム。信義ふくして服従をるい。是禽獣ま也者ろべきま。ふく這器君と心ま掛君の興廃ま臨てい。一心撓まば。居死して君安ゆあるゝば潔く。命と君ま為ま捨ゆ。臣恥と義りて。君安穏と得るふらば。世の恥と受るとも。死と止りて君とふをべき筋あるふ。今海ゞ嘉をところい。匹夫も達る忠ふして。只一通りの何ふふん。這程と為へ。りるるゝと。座程ま去つて速ゆると。熊谷さゝま心解ゆを鞭くと打矣ひ。此熊谷と吸後

させんと。何と仍は百変況とも。敵の益はよもあるまじ。こは夫将たる親忠と。死と共はせんと頑て約せり。其親忠と先は死しめ。君猶とめくと。這世は疎るのこゝろざ。故は降て不忠とこ子孫は疎まべきや。毎益の何と費さんとり。をや首到まと声暴らげ。瞋は泥ゞて言出れ是ば。清正おかひは去矢ひ。斯ハ兵法あり無谷勝直浩る是昧の輩の首と殺べき刃ハ有し。遂と取らぞは我何と。心ちづろは承听れ。汝ゞは長号我弟元親四國は武雪と怨ふ。金狼兵猛山の如く。義戦場は臨むとも。不足とする所有しといへども。其秋滅て心缺り。その不猶いうんとさをと推ふ。是君秀吉去る去。紀伊征伐去むふ

撥會元親後逼し。兵船ともつて後と断内府と挾でうつものあゝべ。軍勝利と得べうしみ撃べき時と徐不は見弁。窮き四國と巨大ありとを。外は堅のかきものあゝば。内府の命は順ふべきは其意も亦古をかくして。上使は兵礼の挙止とをを。然るは秀吉勅令と藉て。吹たざると征伐ふし。天下の政事と正しふして。國と安んゞ民と恵む。是別地天下の武將ゝり。長号我弟ハ叛ゝり。四國の將はもあゝざをべ。軍と進めて其正しうぬと伐。内府の軍勢一遠渡をべ。伊豫とくゞし濃波と均げ。阿波も大半撃破ら。其身ハ阿波白地は在て。本國へ返るとおさたぞ。其后兵しといへども。亦古をと郡助は術

と失ふ。合戦は逼る晌ハ。主人の存亡も思ひそびして。戦死
まうと申とまう。是と誠の忠臣といふべきや。其本と推
ま時ハ。自己が名聞利欲はまるのミ。是と名りて。前後不
弁の猪勇の武士といふ。這理とよ〳〵辨ふべし。其天
下の将と國の将と戦ふ時ハ。天下の将勝といへり。是王
法の大道なるべ。殊は汝が今死して。不忠とあるの
甚取謂ハ。元来長号我弟の家はおひてハ。代〳〵帝王は忠
勤して。其切最も廣大なり。然は元親の不平はよりて。浩
る回象と一時の遅は。根とさち枝を枯さんことと甚ど
惜くもふが也えは。内府預て助命の猪とおぼしめし。土
佐一國ハ領受セしめん。御内意おもしぬるとも。指下の

降系ハ。命を継ぐ志とうさし。甚と汝倅が殘止り。主人と
練めて正は施セしめ。家相続の源セバ。是誠信の忠臣な
らぞや。身退うぞんべ俱は死もべし。死もべきんとも
て。堅く練めて容ざる主ハおきものあり。吟容おき時ハ。
主人のまふ羅て死もべし。志らし金子傳名清ハ。危急は
除で心変ぜぞ。誠ふ云れの勇士あり。感ぞるは程徐りあ
もべ。名侍名清が死嚴をもて。強く葬り一尼の碑と立て。
渠が吉忠を彫んとも。汝が猪ハ長号我弟の直臣ら。金子
が臣らハ知られども。縦令べいづもの臣ふもセよ。汝が
義信の堅固くもがまね誠実あり志がら。女しく跡き形
あるもの。名今備は言吟まるあり。汝戦死志〳〵んはへ。

金子と共に葬るべきこと。存命もることこそ幸なれ。此に微の忠義を達て。長男我紹の家を継させんとあるべ。我紹に法ひ。何分にもよく料理べし。我変して不信ハをまど。然とども今汝と敵帰さしめて。ことと計らせんぞるを思い。絲り穏便るとあるとあり。今より君を陸ふて。心とを是さべ。天地を誓て。事と料理まふをべしと。聞ゆるを熊谷に弟左衛門忠義一徹の心底に。教行の洞留あえぞ。天地の陸に此熊谷と。況果せんものよもあるまじとおもひしを。忍るべし清正の信説義勇剛気の耳を串ひさり。その記来親忠と這河と。そもぐも朝約しての戦死ありしを。其ハ名と貪る峯止のことハ。智者の憶説に方

僅をじめて。義の覚ある意味ぞ。主家を達べき信条おハさべ。呂今の命に陸ひ。長く清正の家居とあり。天地と偕に忠義と謁さん。よきを教と垂ゑへと。思迎で言をを。清正大に悦哉セるもまづ熊谷が縄と解クセ。即地に主従の盃を砂合し。名刀槍を祝弱ふ。今より吉を吉と変ゑんとして。名と華めて吉村吉右衛門忠恒とをのらセるる。吉もより加義の居家とあり。本朝ハいふもさらあり。朝鮮御陣のこぎりをも。一二とあるそふ巻切とを。加義の御内を鬼吉村とようべもしハ。這熊谷のをとを。さて其日の言を清正懇切に指示して。金子が歳と弓尾城余り居の華に葬らセ。遥吉最も厚く弔ひ墓憤と

建営し。焼山導指の山民ふまで。会稽褒湯せしもしうべ。
そと見耳する国民までも。清正ゞ仁義ふ服し。感ぜぬも
のはそなうりき。然して甚后ふ早川ゞ陣ふいり。焼
山面門攻の大功と称美し。勝軍と賞しりもべ隙案もな
き後山城の難難辛苦と詳ふ結同盟嘆いとく限り知
らもず。彼是の賀と冷席ふして。演るも本意と背くふ肖
らうと。酒礁の筵と閑き。諸将坐席と同じうして。後戦の
評議と活らひ。此機ふ乗じて土民ふ攻投。おのく抽切
せらるべしと。佐士ふ伏まで。既ふとふくませ清正ハ攻
陣ふし。右左して豎朝より。焼山の構ふ柵と結陣厳とも
うりて這遭の降士。右村右ち衆つ忠昭ふ。加爰清名清清
澄と副らも。這地の守禦ふ留在ふ早川と一列ふ甚勢二
万三千餘。焼山城と推通り。一隙くふ連て土民と
拵てぞ進発しける

繪本豊臣勲功記八編巻之拾 大早

197
9c
259

明治十四年六月十五日版權免許
同　十五年二月　出版

東京府平民
編輯人　櫻澤一堂山

大阪府平民
出版人　岡田茂兵衛

東京芝區櫻田備前町四番地

東區博勞町四丁目四十六番地
同
同　松村九兵衛

南區心齋橋筋壹丁目四十三番地
東京府平民
發賣人　山中市兵衛

東京芝區三島町九番地

定價壹圓五十錢

197
90
254